



アジア・ジェンダー文化学研究センター第12号 目次

● 特別展示 「奈良女子高等師範学校とアジアの留学生」	1	● 新メンバー研究紹介	19
● 「百合子・ダスヴィダーニヤ」上映会&トーク	6	● プロジェクト研究 「帰国留学生のキャリア形成とライフコースに関する調査Ⅳ」報告 校史史料調査	20
● 公開研究会「災害とジェンダー—台湾と韓国の事例から—」	10	● 校史史料デジタル化作業	23
● 「みやぎジョネット」と歩いた被災地	13	● 2012年度のセンターの活動と編集後記	24
● シンポジウム「私語りとジェンダー」	16		
● 2012年 奈良女子大学女性教員数	18		

| セ | ン | タ | ー | 特 | 別 | 展 |

奈良女子高等師範学校とアジアの留学生

主催：アジア・ジェンダー文化学研究センター

共催：記念館運営委員会 後援：教育システム研究開発センター・一般社団法人佐保会



アジア・ジェンダー文化学研究センターでは、平成24年10月28日(日)～11月8日(木)の12日間、本学記念館(旧奈良女子高等師範学校本館)の一般公開にあわせて、同館2階にて「奈良女子高等師範学校とアジアの留学生」と題する特別展を開催した。これは、平成21年度よりセンターが重点プロジェクトとして取り組んできた「帰国留学生のキャリア形成とライフコースに関する調査」の成果の一部である。

特別展では、センターの調査結果や元留学生から提供された写真などに解説を加えたパネルを掲示し、アジアの女子教育の歴史のなかで本学が果たした役割を振り返った。また、同窓会である一般社団法人佐保会の協力を得て、戦前、アジアに教師として赴任した卒業生から寄贈された中国・台湾・朝鮮の人形も同時展示した。

会期中の来場者数は約3,146名。参観者アンケートには、「アジアの留学生の教育に寄与してきた歴史を知り感動した」「大学の歴史の重みを感じた」という意見が寄せられた。なお、ポスター上段の留学生集合写真は、留学生の遺族より提供されたものであるが、参観者からのご教示で、当時の育英女学校(現育英学園)にて撮影されたものであることが判明した。ご指摘に感謝する。(野村鮎子)

奈良女子高等師範学校とアジアの留学生

期間：2012年10月28日(日)～11月8日(木) 会場：奈良女子大学記念館

後援：一般社団法人佐保会・教育システム研究開発センター



会場風景

■ 展示主旨

奈良女子大学の前身である奈良女子高等師範学校(以下、「奈良女高師」)は、その創立直後から留学生を受け入れており、そのほとんどは中国や台湾、朝鮮、「満洲国」(中国東北部)といったアジアからの留学生であった。彼女たちは卒業後、母国の教壇に立ったり、文筆で名を成したり、あるいは学者や政治家として、アジアの戦後社会の発展を支えることとなった。

アジア・ジェンダー文化学研究中心では平成21年度より重点プロジェクト「帰国留学生のキャリア形成とライフコースに関する調査」に着手し、本学に残る奈良女高師の留学生関連資料を調査してきた。また元留学生やその遺族にもインタビューを行い、留学生の帰国後のライフコースの具体例を明らかにした。特別展示では、センターの調査結果や元留学生から提供された写真などをパネル展示することで、アジアの女子教育の歴史のなかで本学が果たした役割を振り返った。その内容は、以下のとおりである。

■ 近代日本における女子留学生概況

20世紀初頭、中国・朝鮮・台湾をはじめとするアジアの国々から多くの女子留学生が日本へとやってきた。彼女たちの多くは中上流階級の知識女性で、近代化の進む日本で西洋思想や科学技術を学び、それを持ち帰ることで祖国の文化発展を目指したのである。

1910年代～20年代に留学生教育が整備され、官費支給の制度が整うと、官費が支給された奈良女高師と東京女子高等師範学校(現：お茶の水女子大学)に多くの留学生が集まることとなった。特にこれら二校の女高師は、当時日本の植民地であった朝鮮や台湾の留学生にとっては「女子の最高学府」として憧れの的となった。

1932年に「満洲国」が成立すると、国家建設の人材育

成を目的として多くの留学生が日本に送り出された。しかし日本がアジアに対する侵略政策をとるなかで、多くの留学生は祖国と日本との間の板挟みの状況に置かれた。

女子留学生たちは帰国後、特に教育の分野で著しい活躍をみせた。なかには女学校の校長となる者も現れ、祖国の女性教育水準の向上を目指して努力した。医学や科学技術などの専門分野にも、最新の知識や技術をもたらした。

その一方で、戦後の政治状況や複雑な国際関係のために、彼女たちはかつての敵国であった日本へ留学したという経歴を隠さねばならない場合もあった。

■ 奈良女子高等師範学校の留学生について



奈良女高師で学ぶ留学生

奈良女高師創立の翌年の1910年、初の留学生として5名の清国留学生が聴講生として入学した。だが1911

年に辛亥革命が起こると全員帰国し、退学してしまう。その後1922年に朝鮮人学生が1名聴講生として入学すると、朝鮮人の入学が連年相次ぐようになる。

1925年になると「特設予科」が設けられ、奈良女高師に入学を希望する中国人の女子に対して1年間の予備教育が施されるようになった。この制度によって中国人留学生も多く集まるようになった。特設予科を修了した中国人学生は奈良女高師の本科に入学が許可されたのに伴い、朝鮮と台湾からの留学生に対しても、聴講生としてではなく本科生として入学する道が開かれた。1952年に奈良女高師が廃止されるまで、同校に在籍した留学生は200名近くにもものぼった。

(1) 留学生教育の特色

奈良女高師の留学生教育の特色は、ひとつは「特設予科」が設けられていたことだ。当時、「特設予科」が設置された学校は、第一高等学校、東京高等工業学校、東京高等師範学校、広島高等師範学校、長崎高等商業学校、明治専門学校、奈良女高師の7校であり、そのうち奈良女高師の「特設予科」は、女子留学生の予備教育を行う唯一の機関であった。

二つ目は、全寮制であったことである。当時の女子留学生には東京への一極集中の傾向があったにもかかわらず、奈良女高師にコンスタントに留学生が集まったのも、寄宿舎が完備されていたことが大きい。留学生は寄宿舎での生活によって独立した個としての規律ある生活習慣を身につけ、日本人学生との交流も進んだという。



寄宿舎にて

三つ目の特色は、「満洲国」の留学生を数多く受け入れたことである。同じ女高師でも、東京女高師は教員不足を理由に「満洲国」留学生の受け入れを断ることが多かったのに対し、奈良女高師は積極的に受け入れた。「満洲国」留学生の在籍総数は30余名で、これは女学校の中では東京女子医学専門学校の60余名に次ぐ数であった。

(2) 留学生の生活

中華民国と「満洲国」出身の留学生の中には官費(政府からの奨学金)を得るものもあった。中華民国の留学



奈良公園にて、「満洲国」留学生たち。

生は外務省文化事業部による官費(月額40~50円)を得るチャンスがあり、厳しい審査が行われたが、奈良女高師では毎年1~2名の留学生が獲得している。また「満洲国」の留学生には卒業後に「満洲国」に戻り教鞭をとることを条件に、満洲国文教部(後の民生部)による官費(月額20~55円)が、全員に支給された。当時、巡査の初任給が45円、小学校教員の初任給が50~60円の時代である。このほか師範学校の学費は無料であったから、留学生にとっては十分な額であっただろう。

また特設予科では留学生の日本への理解を深めるため修学旅行が毎年催行されており、京都、滋賀、兵庫といった近郊を二泊三日で訪れたり、日帰りで嵐山や比叡山にハイキングに行くこともあった。また本科を卒業予定の留学生のために、日本見学旅行として九州旅行(7~11日間)が行われている。

(3) 在学中の恋愛はご法度

奈良女高師では外出にも厳しい制限があり、また親族以外の男性と会うことは許されなかった。これは留学生にも適用されたが、学校側は社会規範が異なるので仕方がないという見解から、実際には大目に見ていた。在学中に恋愛する留学生もあり、その相手は多くが同じ留学生であった。ただし外部からの指摘で男女交際があかるみになった場合は、「家庭の事情」という理由で退学処分にされることもあった。



男子学生と、奈良公園にて。

(4) 留学生とナショナリズム

奈良女高師で留学生たちが学んだ時期は、日本でアジア蔑視の風潮が日増しに強くなっていく時代でもあった。留学生の中には、ナショナリズムに目覚め、これを行動に移す者もいた。だが多くは学校や警察の取り締まりに遭い、断念せざるを得なかった。例えば1927年に日本政府が陸軍の山東出兵を決めた際、中華民国留学生17名が集団で出兵反対の宣言書を出したが、ただちに警察に取り押さえられてしまった。また朝鮮人留学生は20年代後半から、しばしば裁縫の時間に朝鮮服を縫いたいという要望を提出したが、学校には受け入れられなかった。そのほか朝鮮人留学生は学外の民族に関わる集会に出席するたびに、警察から学校に連絡が入り、注意を受けた。また留学生同士が朝鮮語で話すだけで警戒されるという、厳しい立場に置かれていたのである。

■ 卒業後の進路

奈良女高師の本科の卒業留学生総数は101名で、その出身地は朝鮮44名、中華民国29名、「満洲国」25名、台湾3名であった。戦前の日本では女性の大学入学は認められていなかったが、1929年に創立された東京文理科大学と広島文理科大学は女高師卒業生の入学が認可された。そのため、卒業留学生のなかにはこの文理科大学に進学を希望する者もあられ、実際に広島文理科大学へは8名、東京文理科大学へは7名が進学している。そのほかにも、正規の学生としてではないものの、研究生や選科生、聴講生として帝国大学へと進学する者もあった。



広島文理科大学で学ぶ卒業留学生（後列左端）。当時、大学で学ぶ女性は極めて少なく、女学生一人の「紅一点」であった。

しかしながら、進学する留学生はごくわずかで、卒業留学生の多くが母国へと戻り、教育界で活躍した。朝鮮、「満洲国」、台湾の留学生の多くは、母国の名門高等女学校で教鞭をとった。また中華民国の留学生は日本留学の経歴を活かして大学や官庁で働く者もあった。

■ 卒業留学生のライフコース

本センターでは、卒業留学生のライフコースについて、ヒアリング調査や史料調査によって明らかにしてきた。展示では、そのうち4名の元留学生の人生の足跡について紹介を行った。

(1) 許春菊女史(1918~1997)

政治家として活躍した台湾留学生

許女史は台湾で通っていた高等女学校で、台湾人教師の莊無嫌先生から彼女の母校である奈良女高師への進学を勧められたため、奈良女高師へ進学する決心をした。1934年に家事科に入学、優秀な成績で1938年に卒業している。帰国後、彼女は戦後の台湾で女性として最初の台湾省議員・立法委員（日本の国会議員に相当）となり、国政に40年のあいだ携わった。家庭人としては医師と結婚し、8人の子供に恵まれており、仕事と妻や母としての役割との両立に奮闘した。



台湾の国会議員に立候補——許女史の選挙チラシ。

(2) 田琳女史(1916~1992)

女性作家となった「満洲国」留学生

田女史は1937年に特設予科に入学、その後文科で1942年まで学んだ。この在学中に、田女史は本格的な創作活動を始めており、大阪毎日新聞社発行の雑誌『華文大阪毎日』誌上で新進の女性作家として活躍した。卒業後は「満洲国」に帰国し、女子高等学校で教員として働きながら文筆を続け、1943年には単行本『安荻と馬華』を出版している。この単行本には合計29篇の作品が収められ、その大部分が日本留学中に創作したものであった。1949年の中華人民共和国成立後も作家として活躍するが、60年代に文化大革命が勃発すると、「日本のスパイ」という容疑をかけられ逮捕される。その後79年に名誉回復されるまで創作の自由が奪われた。80年代から文壇に復帰し、92年に世を去るまで数々の作品を残した。



雑誌『華文大阪毎日』では田女史の写真入りで作品が紹介されることもあった。

(3) 高素威女史(1924~)

動乱の時代を生きて

高女史は大連の高等女学校在学中に修学旅行で訪れた奈良の雰囲気に惹かれ、また女学校の恩師である日本人の先生が奈良女高師出身者であったことから、奈良女高師への進学を決めた。1941~42年に特設予科、その後文科で45年まで学んだ。帰国後、国民党の官庁に勤務し、1949年の中華人民共和国成立後は南開大学の附属幼稚園長を務めたが、59年病を得て離職する。その後60年代に文化大革命が起こると、日本留学の経歴は批判の対象となり、幾度となく「日本のスパイ」として紅衛兵に家捜しされた。南開大学の施設課に遷り、79年に定年退職している。家庭人としては、1947年に日本留学から帰国していた男性と結婚し、2男2女に恵まれ、幸せな家庭を築くも、1957年に夫と死別する。その後動乱の時代のなか、女手一つで子どもたちを育て上げた。



家族を築いて

(4) 王興榮女史(1926~)

学ぶために世界を駆けた「満洲国」留学生

教師を目指していた王女史は、奈良女高師が有名校であること、官費も支給されることから、進学を決意した。1943年~44年に特設予科で学び、その後1944年

に本科の理科に入学するが、戦争が激化したため半年ほどで授業は停止してしまう。戦争が終わると中国へ帰国し、南京の金陵大学、台湾の台湾大学で数学を学んだ後、台湾で教員となる。その後渡米し、テキサス・テック大学で修士学位取得後、香港中文大学で教鞭をとる。同大学を定年退職後、ふたたび渡米し博士学位を取得する。現在、カナダの友人や米国在住の姪たちに囲まれて、忙しくも充実した日々を送っている。



さらに学びを求めて——南京の金陵大学にて

■おわりに

ご存命の元留学生や留学生のご家族のお話から、戦前に女子の最高学府で学んだという矜持を胸に、戦後の厳しい時期を生き抜いてきた知識人女性たちのライフストーリーが浮かび上がった。

ただ、今回ヒアリングに応じてくださった方々の中には、日本留学という経歴ゆえに、戦後に不利益を被った方もおられ、また、かつて「満洲国」派遣の留学生であったという経歴を他人には知られたくないということで、匿名でのヒアリングを希望された方もおられた。そのため、今回、匿名を希望された方についての展示は割愛させていただいた。

「歴史問題」は単に過去の歴史の問題ではなく、現在の問題でもある。現在日本で学ぶアジアからの留学生が、二度とこのような思いをしなくてすむようなアジアの未来であることを心より祈りたい。

(記録:羽田朝子)

<同時展示>

佐保会所蔵の中国人形・台湾人形

奈良女高師の学生は、卒業後に教員になることが義務づけられていたが、卒業生の中には満洲や中国東北部、朝鮮、台湾といった外地に移り住み、かの地で教壇に立つ女性もいた。そうした女性教員にあこがれて奈良女高師に留学する道を選んだ女子留学生がいたことは、これまでの元留学生へのヒアリング調査から明らかになっている。

そこで、同窓会である一般社団法人佐保会の協力を得て、戦前アジアに教師として赴任した卒業生から寄贈された現地の人形を同時展示した。

『百合子・ダスヴィダーニヤ』上映会&トーク



日本では、女性の映画監督は非常に少ない。映画の作り手の性が偏っていることは、もしかすると女性像や女性たちの生き方の表現も偏りがあるのかもしれない。女性が様々な局面で活躍する現在があるのは、言うまでもなくその世界を切り拓いてきた人たちの存在があるからである。日本でおそらく一番多くの映画を撮ってきた女性映画監督・浜野佐知さんと脚本の山崎邦紀さんをお招きして日本の映画界のジェンダー環境と作品世界について語っていただいた。



女性映画監督 浜野佐知氏



脚本家 山崎邦紀氏

2012年6月29日、全学共通科目「ジェンダー論入門」の講義に講師として浜野佐知監督をお迎えして、「映画制作とジェンダー」というタイトルでお話ししていただいた。

日本の映画界では、圧倒的に女性監督は少ないが、その実態は日本映画監督協会の会員約600名の中で女性は20名程度、その中で劇映画監督は2,3名とされる。浜野監督のように女性たちにとって劇映画を制作することが極めて困難な状況は現在でも続いている。また、女性監督の活躍の場は記録映画(ドキュメンタリー)というジャンルに多いことも、映画業界全体のヒエラルキーの反映である。記録映画は劇映画に比べて商業性がないため、女性の参入に対して寛容であったとされる。では、なぜそのような状況の中で浜野監督は劇映画を

作り続けてきたのか。

*

1960~70年代の日本において映画監督になる道は、すなわち大手映画会社に入社することだった。しかし、大手映画会社の採用条件は「大卒男子のみ」とされており、女性には門戸が閉ざされていた。つまり日本の映画界は女性映画監督を最初から育てていかなかったし、支援もしていなかったことになる。女性である浜野監督が映画監督になる限られた道は、ピンク映画の世界で映画制作の技術を学ぶことだったという。

映画業界に入ってから様々な差別はあり、それはしばしば自分自身の尊厳に関わるものでさえあったと浜野監督は話された。男性のみの現場に若い女性が一人で入っていく際にどれほど多くの困難があったかと

いうお話は、今の学生たちにはにわかには想像できないことだったかもしれない。現代の女子学生たちも少なからず就職活動で不当な思いをすることはあるかもしれないが、あからさまな「差別」はなくなりつつある。しかし、ほんの半世紀前の日本では当たり前のように誰もが同じ権利をもって職につけたわけではないということ、また今の自分たちの状況が先輩女性たちの開拓によってもたらされていることが感じ取れただろう。

浜野監督が劇映画を目指したのは、子どもの頃から映画好きでよく映画館に行っていたが、その際日本の映画に対して抱いた疑問からだったという。

「日本の映画は何かがおかしい」。登場する女性たちは母、妻、娘、愛人・・・というステレオタイプな「役割」で描かれている。現実の女性たちは男性と同じく、決して一つの役割のみで生きているわけではない。しかし映画の中の女性たちはこうした「役割」に分断されていた。息子を溺愛する母、夫にかしずく妻、父を尊敬する娘・・・これらは男性にとって都合のいい女性ばかりではないのか？こうした疑問から、浜野監督は自分が映画監督になって自分なりの女性像を描こうと思ったと話された。

しかし、前述のような就職の壁がある。「女になれない職業が、今の、この日本にあってたまるか」と決意し、ピンク映画の道に進み、これまで300本を超える映画を制作してきたという。長くピンク映画を制作してきたが、1998年から一般劇映画制作も手掛け、多くの女性たちの支援とネットワークによって女性監督として発信を続けている。

授業の後半では浜野監督『百合祭』(2001年公開、原作：桃谷方子)のダイジェスト版を上映していただいたii。『百合祭』は高齢者の性と生をテーマにした映画として世界各国で高い評価を受けてきた作品である。時に微笑ましく捉えられる「老いらくの恋」もあるが、老年の性愛には「老醜」「老残」といったイメージが強く表され、忌避、封印されてきた側面がある。なかでも女性は、介護やアルツハイマーなど「老人問題」の対象となることが多く、主体的な性愛など、タブー視されているのではないと思われるほど描かれてこなかったが、『百合祭』ではこうしたエイジングハラスメントを笑い飛ばし、高齢者の性愛を肯定的に描き出している。

*

講義後には、受講生との間で次のような質疑応答があった。

「浜野監督が男性社会の中で苦勞されてきたことと、女性の同性愛について描こうとされたことには関係があるのか？」という問いに対して、「私は現在の男性中心社会のあり方について反発しているのであって男性そのものに反発しているわけではない。男性が嫌だから女性同性愛というわけでもない。しかし今の社会の男女平等はまだまだだと思うから差別される側の抵抗の視線を描きたい。また、100%異性愛という性愛のあ

りかたもおかしいのではないかと考えている。女性同士だからこそわかりあえると思うこともあるので、『百合祭』や『百合子・ダスヴィダーニヤ』を描きたかった」。

また「すごい男性社会に飛び込んでいらしたわけですが、その時、どうやって自分を励ましていらしたのか。アドバイスをください。」という発言には次のように応答された。

「たった一言。「こんちくしょー！」です。怒りです。怒りはエネルギーになります。不条理や自分に対して迫ってくる差別に対して、決してあきらめず楽しく怒っていくことが大切。もう一つ、60歳になった時、20歳の自分に「あなたは間違っていないよ」と言ってあげられる60歳になっていようと思った。自分は男を超えようとか、男並みになろうと思ってきた。男よりも・・・と思い続けてきた。そんな必要はないのです。自分は女なのだから、女として自分を認めさせればいいのです。私たちは女性がそんなことをしなくてもいいような社会を作っていかなければなりません。」

授業後のコメント用紙からは、この言葉に触発された学生が大変多かったことが読み取れ印象的であった。ジェンダー論を学び、未来の男女共同参画社会を担うということが、決して「男並み」や「男よりも」という基準だけではないことを意識化できたのではないだろうか。最後に「生涯「これが自分だ」と思える仕事を持ってほしい。」と学生たちにエールを送っていただいた。

*

翌6月30日には奈良女子大学の講堂で『百合子・ダスヴィダーニヤ』(2011年公開・原作：沢部ひとみ)の上映会を開催し、その後浜野監督と脚本の山崎邦紀氏によるトークとなったiii。一般公開ということもあり、会場には多くの学外の方々が足を運んでくださり、映画を楽しむとともに浜野、山崎両氏のトークにも参加していただいた。

『百合子・ダスヴィダーニヤ』は、後に「スカートをはいた侍」と呼ばれ、「女を愛する女」であることを隠さずに生きたロシア文学者である湯浅芳子と、17歳で「貧しき人々の群」を発表し天才少女作家として騒がれた中條(宮本)百合子の出会いの経緯を描く恋愛ドラマである。芳子に出会った時、すでに古代ペルシア語研究者の荒木茂と結婚していた百合子であるが、二人はすぐに惹かれあう。荒木との確執なども含めた異性愛と同性愛の交錯する関係性を描いた作品である。

『百合子・ダスヴィダーニヤ』のストーリーと作品背景は以下の通りである(概ね映画パンフレットより引用する)。

1924年(大正13年)ロシア語を勉強しながら、雑誌『愛国婦人』の編集をしていた湯浅芳子は、先輩作家・野上弥生子の紹介で、中條(後の宮本)百合子と出会う。百合子は17歳で作家としてデビューし、19歳の時に遊学中

のニューヨークで15歳年上の古代ペルシア語研究者の荒木茂と結婚するが、5年後芳子と出会った頃には二人の結婚生活は行き詰まっていた。

お互いに惹かれあった芳子と百合子は、親しく付き合い始めるが、芳子は「私は、男が女に惚れるように、女に惚れる」と公言して憚らない女性だった。二人はお互いの関係をディスカッションしながら深めて行く。しかし、それは荒木にとって生活の根底を揺るがすものだった。

20歳で渡米し、15年間にわたって苦学した荒木は、百合子と結婚することによって帰国し、大学教授の職も得ることができた。芳子に百合子を奪われることは、なんとしても避けなければならないことだった。

百合子、芳子、荒木の3人は、東京と百合子の祖母が住む福島県の安積・開成山(現・郡山市)の間を往復しながら、異性愛と同性愛の交錯する葛藤を繰り広げる。これは、大正から昭和にかけてのトゥルー・ストーリーで、芳子と百合子はその後7年間を共に暮らした。しかし、一緒に渡ったロシア留学から帰国後、百合子は共産党員の文芸評論家(後に日本共産党書記長)宮本顕治のもとに走り、二人の共同生活は無残に破綻してしまう。

百合子は荒木との結婚から芳子との出会いまでを、名作『伸子』に描いたが、戦後の『二つの庭』『道標』では、逆に芳子を否定的に描いた。しかし、芳子がそれに反論することはなかった。かたく沈黙を守った芳子だが、最晩年に沢部ひとみが密着取材を行い『百合子、ダスヴィダーニヤ』(学陽書房、1996年)を刊行する。芳子の側から見た二人の真実が明らかにされ、本映画作品の原作となっている。

*

上映後、浜野監督と山崎邦紀氏にご登壇いただいた。

浜野監督は冒頭に映画のタイトルについて言及した。『百合子・ダスヴィダーニヤ』とは、「さようなら(=ダスヴィダーニヤ)、百合子」という意味で、前述したように沢部ひとみ氏が最晩年の3年間、湯浅芳子を密着取材して著した本を原作としている。制作から遡ること15年、監督はこの原作に出会ったという。監督は知人の紹介で原作を手にして、「読んだ瞬間心臓をわしづかみにされ」て、映画化を決めたそうである。

100年前の日本で、「私は、男が女に惚れるように、女に惚れる」と公言する芳子に強く惹かれた監督は、言葉をぶつけあい高めあった二人の女性の姿を、今の人たちに届けたいと思ったと語った。まさに、自己のセクシュアリティを隠すことなく生きた芳子が生涯をかけて愛した女が中條百合子だった。

とはいえ、映画制作は決して順調にすべてが進んだわけではなく、15年間の間に別の映画を撮りながら本作品の映画化を諦めずに取り組んできた。浜野監督は本作に対するその強い思いを次のように語った。

「もし、これから撮る映画が最後の映画だったら何を

撮るって考えたら、この映画を撮るって思った。」

そう思った時、制作のためにお金を集めたり動き出したりすることができ、そうなることで「浜野佐知監督を支援する会」ができて草の根活動で協力して下さったそうである。つまり、浜野監督にとって本作品は、湯浅芳子という女性の生き様を描きたいという強い思いと、浜野監督の思いを支援する多くの監督のファンによって支えられた集大成だと言えよう。

また本作品の映像的な魅力の一つとして、大正期のモダンなファッション(特に百合子役の)や、男性風に着物を着崩した芳子の姿がある。実際に大正期の着物を用い、撮影は舞台の一つである猪苗代などの他は、ほぼ監督の故郷である静岡の近代建築が使用されている。こうした視覚的な細部へのこだわりによって、芳子と百合子が生きた時代が鮮やかに再現され、観客をモダンイズムの日本へといざなう吸引力となっていると言えよう。



脚本を書かれた山崎邦紀氏からも、本作が二つのテキスト——宮本百合子による小説『伸子』と沢部ひとみ氏による『百合子・ダスヴィダーニヤ』——からなるもので、特に沢部氏の著作をもとに脚本を起こしているとの言及があった。芳子と百合子、そして荒木の三人に焦点を当てて描きたかったという意図があったこと、さらに芳子の元恋人である祇園の芸者セイについての描写などは、沢部テキストでなければわからなかった点であるというお話は大変興味深かった。

*

続いて行われた会場との質疑応答では次のようなやりとりがあった。

一般に男性同性愛についての表現は多いように思われるが、女性同性愛を取り上げた作品は少ないように思われる。この作品は「非常にきれいで、いやらしい感じがなかったのでとてもよかった。監督が女性であるということから、女性の同性愛を取り上げやすかったということはありますか？」という質問に対して、「男性同士の同性愛の方が、現在でも市民権を持っているのは確かでしょう。また、女性同士の関係を描きながら、



結果的に友情の形で留まるものが多いと思う」と、女性同士の恋愛表現については、やはり作例が少ないことを指摘しつつ、しかし、最近では日本でも若い女性映画監督たちが女性同士の愛情を描き始めていると話された。

さらに、「女性監督だから」レズビアン映画を作りやすかったかというところでもなかったと話された。「自分が撮りたいものしか撮れない」という監督自身の制作との向き合い方が前提にあり、この映画については湯浅芳子と中條百合子の関係性そのものという、真に描きたかったものがあったのだという。

女性映画監督であることと、女性同士の恋愛を描くということは、ある部分で映画制作の基盤としてつながりつつも、そのことが常に直接的な動機ではなく、今回の場合には湯浅芳子という女性の生き方への共鳴が重要だったということである。

*

続いて大正・昭和初期の女性について研究している方から、女性がおかれた状況は今もあまり変化していないように感じられること、女性たちはずっと沈黙させられていることが指摘され、その意味では後半で芳子が荒木を殴るシーンは気持ちよかったという感想があった。

これに対して監督からは、女性が平手で叩いてもそれはまるで男性に対する愛情表現みたいに見えるがだから、「やっぱりグーで殴るべき！」として、拳で殴るシーンは怒りの表現という意図があったと話された。そして、この時代の女性たちの関係性についても、女性同士で支え合う関係性が生まれ始めていたのではないかと、また今よりはもしかしたら女性同士の深い関係が存在したのではないかと言及された。その意味では、やはり女性が置かれてきた状況はあまり変化していないのかもしれないし、一方で変化があったと言うべきなのかもしれない。

*

最後に、今の社会とは全く異なり、ヘテロセクシュアルな恋愛が基本となる時代において、中條百合子と湯浅芳子という二人の女性が生きていたこと、この二人

が互いに高め合い議論を重ねながら関係を紡いでいたことを、多くの人に知ってもらいたいと浜野監督は語られた。

この映画の世界は、近代日本の女性史として、また近代文学の側面として極めて重要なことは言うまでもないが、原作を脚本化し、劇映画とすることでテキストにはない時間的・空間的表現の奥行きが生まれ、それが浜野監督のオリジナルの世界となっている。

ヘテロセクシュアルな社会の中で、自己のセクシュアリティを表明し生き抜いてきた湯浅芳子の生き方も、ホモソーシャルな社会の中で闘いながら映画監督の道を切り拓いてきた浜野監督の生き方も、ジェンダー論を学ぶ人にとって、また若い学生たちにとって大きな意味を持つものであろう。映画の制作者側の貴重なお話をお聞きする機会をいただき、女性が表現者として生きる上での社会的問題などを積極的に語ってくださった浜野佐知監督と、原作から監督の意図を汲みつつ脚本化するプロセスを丁寧にお話くださった山崎邦紀氏に心から感謝したい。
(山崎明子)



i 浜野佐知監督については以下を参照のこと。

旦々舎ホームページ

<http://www.h3.dion.ne.jp/~tantan-s/>

また、浜野佐知『女が映画を作るとき』平凡社、2005年も参照のこと。

ii 『百合祭』オフィシャル・サイト

<http://www.h3.dion.ne.jp/~tantan-s/yurisai.html>

iii 『百合子・ダスヴィターニヤ』オフィシャル・サイト

<http://yycompany.net/>



災害とジェンダー 台湾と韓国の事例から

日時: 2012年4月25日(水) 14:40~16:10 場所: 文学部南棟 S 230

2011年3月11日の東日本大震災以後、ジェンダー研究の分野でも「災害と女性」あるいは「復興と女性」というテーマに関心が集まっている。そこで2012年4月センターに客員として滞在中の蕭媽媽教授(台湾清華大学「ジェンダーと社会」研究室主任)と、本学教授でセンター運営委員の松岡悦子教授の2人を報告者として、アジアの「災害とジェンダー」をめぐる研究会を開催した。

研究会では、まず台湾のドキュメンタリー《築窩的女人》2011年(The Women's Nest)の一部を視聴した後、蕭媽媽教授よりそこに描かれた女性のエンパワーメントについての報告があり、その後に松岡悦子教授より韓国での調査に関する報告があった。

■ 映画《築窩的女人》とあらすじ

伍心瑜監督/英語名The Women's Nest/台湾

2009年8月8日、モーラッコト台風は台湾中南部に洪水・斜面崩壊・地すべり・河道閉塞などの大災害をもたらした。このとき高雄市山間のナマシャ区も孤立状態となり、当地の原住民族(注参照)たちは山を下り、平地の軍営キャンプでの避難所生活を余儀なくされる。2003年からナマシャ区で活動を続けてきた女性組織「女窩」(女の巣の意味、高雄市婦女永續発展協會)は、避難生活の中で同胞女性たちを支援し、原住民族の文化を伝承する活動を再開する。

しかし、彼女たちを苦しめたのは災害による心的外傷後ストレス障害だけではない。復興政策は原住民族を山に帰る者と平地に定住する者とに分断し、彼らが台湾において今なお周縁的存在であることを再認識させることになった。民族の伝統的性別役割観念である「男は外、女は内」という陋習からの圧力もあった。

半年の避難所生活を終え、山に帰った者、「女窩」をやめて平地に定住することを選択した者、彼女たちを待ち受けていたのは、さらなる困難だった。それでも一歩、一歩、生活秩序を取りもどすべく、彼女たちは力強く歩みつける。

注:原住民族…漢民族が台湾に移住する以前からいた民族の総称。政府公認は14族、488,773人。台湾の総人口の約2%。

■ 蕭媽媽教授報告

「災害と女性のエンパワーメント—台湾の事例」



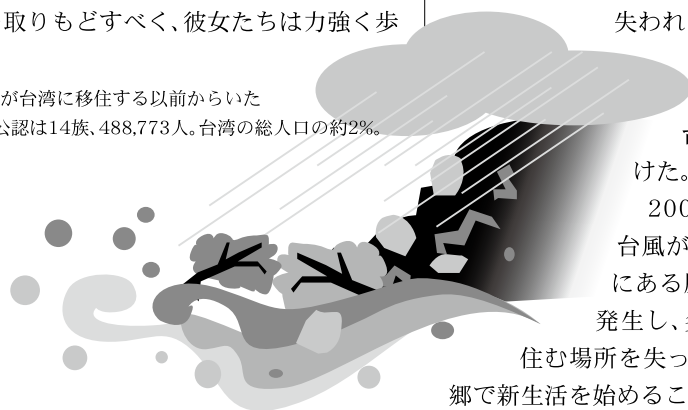
蕭媽媽 教授

はじめに

台湾と日本は自然災害に関して似通ったところがある。ともに地震や台風が多く、水害や土石流に見舞われやすいという特徴がある。

台湾において、ここ10数年来、最も深刻だったのは1999年9月21日に発生した「九二一大地震」である。台湾中部埔里付近の「九份二山」を震源地とするこの大地震では、山全体に激しい地滑りが起こり、多くの家屋が失われた。このとき、国際救援隊を組織し、先陣を切って救援に駆けつけてくれたのは日本であり、台湾は日本から多くの援助を受けた。

2009年8月8日には、モーラッコト台風が「八八水害」をもたらした。山間にある原住民の村に大規模な土石流が発生し、多くの人命が喪われた。そして住む場所を失った原住民たちは故郷を離れ、他郷で新生活を始めることを余儀なくされたのである。



先にみなさんにご覧いただいた台湾の若手ドキュメンタリー監督伍心瑜による《築窩的女人》は、この水害を背景とし、被災した原住民の女性たちがともに努力奮起する姿を描いたものである。

原住民族女性が置かれている苦境に注目してほしい。ドキュメンタリーには被災による故郷喪失、それにもなう家族離散や家庭生活の激変、そして家族の自殺という悲劇が映し出されている。

1. ルーツを失った原住民—土地と家庭

原住民は台湾社会においては、弱者であり、周縁に属するエスニック・グループである。日本統治時代から国民党政府の統治時期を経て、幾度となく住んでいる部落を離れるという「遷村(集団移転)」を経験してきた。そして、そのことにより民族の固有文化のルーツを失ってきた。彼らは政府の土地政策の犠牲者といってよい。

《築窩的女人》の冒頭には、原住民が実際に立法院に赴き、政府が土地と居住権を剥奪したことに抗議する様子が登場する。郷里の土地を失ったことで、原住民の家庭生活は様変わりした。老人と子供だけが部落にのこされ、年若い者は生活のために郷里を出て都市での仕事—肉体的にきつい建築や運輸業などに携わることになる。《築窩的女人》に登場する女性たちの夫もたいていは出稼ぎに行っており、家を守り子どもを教育する責任はすべて彼女たちにのしかかっている。

かつての原住民族は黙って台湾社会における周縁的地位に甘んじてきた。しかし、2000年、民進党政権がはじめて原住民委員会を創設し、原住民族にかかわる公務を掌るようになって以後、原住民にも基本的権利を勝ち取ることにについての意識が芽生えてきた。

原住民の社会文化に対する覚醒では、原住民族の知識青年が重要な役割を演じている。彼らは自らのエスニック・グループの権利のために、声を挙げたのである。たとえば、ドキュメンタリー《Alis 的意願》(アリスの願い)を撮った莎朧は原住民族出身で、シカゴ芸術学院で専門の訓練を受けた経歴をもつ。《Alis 的意願》は、アリスという名の原住民女性のライフストーリーについての語り(中国語ではない、原住民の言葉を使った語り)を通じて、原住民族にとって土地と文化が不可分なもので、根源的に重要な意味をもつことを、映像という形で主張したものである。

2. 災害と女性のエンパワーメント

女性のエンパワーメントという点に話を移したい。「九二一大震災」の後、女性たちは生活のために現地の農産物や手工芸の工房の小規模な経営を始めた。そこで作られる商品は、コミュニティーやインターネットを通じて販売され、人気を集めている。この事実は、被災女性のとくましい生命力を示すものである。

しかし一方、復興住宅をめぐる問題は、被災女性に深

刻な影響を与えている。2009年の「八八水害」では、大規模な土石流によって故郷を離れざるを得なくなった原住民に立ちはだかったのは、どこに住むかという問題である。政府は平野部に仏教系団体である慈済基金を通じて復興住宅団地を建設した。しかし、原住民はこの政策に対して、さまざまな反応をした。多くの原住民は、これは仮の住居であって、最終的には山に帰りたいたと思っていた。これを契機に山を下りることを決断する者もあった。しかし、彼らにとって、土地と文化は不可分なものである。復興住宅団地に対する考え方の違いは、相互不信をうみ、エスニック・グループ内の人間関係を破壊した。

原住民の女性たちは民族とコミュニティーのために組織を立ち上げた。しかし、コミュニティーの全面的な支持や承認を得ることはできず、夫からは女性の団結は男性の権力や存在を脅かすものだとさえ受け止められた。

被災体験はジェンダー関係を改変させ、緊張と衝突をももたらしたといえる。《築窩的女人》は女性たちの細かい日常を記録することで、被災後のリアルな家庭生活と女性の団結へむけた努力を描きだした。彼女たちは困難な生活、さらには夫の自殺という打撃に力強く立ち向かう。災害がもたらした身をもぎとられるような感覚や欠落感、挫折ややるせなさ、このドキュメンタリーに再現されている。

天災による苦しみは運命の巡りあわせによるものだが、原住民の権利は長きにわたってあまりにも無視され、政治面で長い間抑圧されコントロールを受けてきた。しかし、原住民女性には素朴な楽観的思考と強靱な生命力をもって災害に立ち向かう。これは女性監督がドキュメンタリーで描きたかった重要な点なのだ。

(翻訳:野村鮎子)

■ 松岡悦子教授報告

「災害とジェンダー—韓国調査より」



松岡悦子 教授

はじめに

災害からの復興に関しても、ジェンダーへの配慮が必要だと認識は高まっている。だが、人文・社会科学の立場からの災害研究は多くなく、研究としてはまだ端緒についたばかりと言っていいだろう。今回の報告は、

科研基盤(B)「ジェンダーと災害復興—制度設計と生活再建をめぐる課題に関する国際比較研究」(代表山地久美子)の分担研究者として関わった韓国での調査の報告である。

1. 災害とジェンダーに関する研究の視点

まず韓国での調査報告に入る前に、災害とジェンダーに関する文献の整理から始めたい。災害(とその復興)の社会学的な研究を見ていると、そこにいくつかの視点があることに気づく。まずは、途上国と先進国という視点である。これまで多くの災害が途上国で起こり、それを支援に行った先進国のNGOなどの援助団体や研究者が、被災地の人々について語っている。災害を支援する側の視点から、支援される人たちが描かれているのである。そこでは、復興支援は開発のための一種の介入(intervention)であったり、社会変革のきっかけとされ、伝統や因習の中にある人々がより平等で公正な社会を作っていくための契機として語られている。

2. 災害における女性の語られ方

さらに、災害において女性がどのように語られているかを見ると、そこには2つの見方が交錯している。一つは、女性がか弱い存在(vulnerable)として描かれる場合であり、もう一つは女性がたくましい存在(capable)として描かれる場合である。たとえば、か弱い存在の例では、災害の犠牲者の7~8割が女性だったというスマトラ沖津波の例がある。女性は泳ぎ方を知らず、動きにくい服を身にまとい、子どもや年寄りの世話を任され、文字が読めないために情報にアクセスしづらく、結果的に死者が増えたとされる。つまり女性は伝統や因習の犠牲者であり、性的な攻撃や暴力の犠牲になりやすく、そういう意味で災害弱者とされる。それに対して、たくましい女性像も描かれている。たとえば、復興において女性が大きな働きをしたり、地域や家庭の生存に不可欠の役割を果たす、また復興において地域でリーダーシップを発揮したり、社会変革のエージェントになるという例である。そこでは、女性は因習や伝統を変革するキーパーソンとして、援助団体から期待を込めて描かれている。このように災害においても、女性をめぐる表象は、語る側の文脈によってさまざまに描かれると言えよう。

3. 韓国インジェ郡での調査

次に、韓国で2010年と2011年に行った調査について報告したい。韓国は災害の少ない地域で地震はなく、水害がたまにあるだけと言われている。水害の中でも代表的な例として、2006年7月のインジェ郡の川の氾濫が知られている。死者20名、不明9名、避難世帯564世帯というもので、日本の災害と比べて規模は大きくない。このインジェ郡が、韓国の災害復興の話でよく例



にあげられるのは、復興にあたった当時のインジェ郡の里長(村長)のリーダーシップが大きく、住民が主体的に復興を成し遂げたとされるからである。

そこで、このインジェ郡の里長に聞き取りした内容を紹介したい。里長は、災害が起こる以前から防災訓練を行い、住民どうしが信頼し合える関係を築いていた。そしていったん災害が起こると、寄付集めの広報を積極的に行い、行政からの支援だけでなく、一般市民からの寄付を募った。おかげで学生ボランティアが2300名も訪れ、軍隊も積極的に関わってくれた。そして被災した人たちの心のケアが大切だと思い、西洋医と漢方医の両方に援助を求めた。里長は、行政と市民ボランティアと防災の専門家の協力を得たと語っている。避難所については、韓国では1階が女性たち、2階が男性というように男女別の空間になるようだった。日本のように家族ごとに集まるのではなく、男女別になることで、女性の感じる不便さは減じるのかもしれない。しかし家族が一緒の空間におれないと言う不便さも同時にあるだろう。また避難所では、男女のステレオタイプがはっきりと見られた。女性は避難所での食事作り、子どもの世話などの雑多な用事を任されていた。さらに、災害に会うことで、インジェ郡では伝統が復活したと述べていた。つまり、決まった日に民族衣装を着る習慣やお年寄りにあいさつする習慣が復活したと言う。これは、災害によって伝統から脱皮してよりモダンな社会に移行する場合もあれば、伝統が復活する場合もあることを示している。調査当時、インジェ郡では災害復興と観光振興をつなげて、インジェを防災体験のできる村として売り出そうとしていた。

しかし、村から出ていく人々を食い止めることは難しく、インジェ郡のカリサン村では災害前に75世帯あった人口が2011年には50世帯に減っていた。インジェ郡の話で明らかになったのは、物資の分配や人の採配を行うリーダーの重要性であった。またジェンダーについては、災害復興においてジェンダーのステレオタイプがむしろ強化される可能性であった。災害にジェンダーの視点を入れた研究は、今後重要になっていくであろう。

(松岡悦子)

「みやぎジョネット」と歩いた被災地

「みやぎジョネット」(みやぎ女性復興支援ネットワーク)は、仙台に拠点を置き、東日本大震災の被災地女性と全国支援者の思いを結ぶことを目的として活動を続けているNPO団体である。2012年5月10日(木)～11日(金)の2日間、本センターに客員研究員として滞在中の蕭媽媽教授(台湾清華大学「ジェンダーと社会」研究室主任)とともに、南三陸町や気仙沼を訪問し、「みやぎジョネット」が被災地で取り組んでおられる女性のエンパワーメント活動の実際を学んだ。

野村鮎子

■「みやぎジョネット」との出会い

今 年度センターの客員としてお迎えした蕭媽媽教授の研究テーマは「災害と女性エンパワーメントに関わる日台比較研究」(10頁参照)で、日本で被災地女性への支援活動を調査したいとのご希望であった。

当初、私には被災地訪問にためらいの気持ちがあった。当時、「週末になると見学者で賑わう被災地」がメディアで話題になっていて、「見学ツアーは地元の経済活性化につながる」という声がある一方で、「震災の爪痕を見学するためだけに行くのは、被災者の神経を逆なでする行為だ」という見方もあったのだ。私たちはのちに被災地の人々は多くの人に被災地の実態を見てもらいたいと思っていることを知るのだが、その時は復興の邪魔だといわれるのではという遠慮があった。

女性支援組織についての情報もほとんどなかった。震災ボランティアの経験をもつ人々に尋ねても、復興支援の団体は多いが、女性支援に特化したものとなると心当たりがないという答えが返ってくるだけだった。

半ばあきらめかけていたとき、本学の同僚からある小冊子を渡された。宮城県環境生活部共同企画社会推進課発行の「復興ing みやぎwith NPO」である。その名のとおり、宮城県で活動中の20のNPO団体を紹介したもので、「みやぎ女性復興支援ネットワーク」もその一つとして紹介されていた。

早速、知人を介して代表者に連絡をとったところ、新代表の草野祐子さんから訪問を歓迎する旨のメール連絡があった。しかも活動拠点の一つである南三陸町に同行して下さるとの温かい申し出である。

■全国郷土銘菓集め

本 学の学生にとって被災地は気軽にボランティアに通える距離にはない。手助けしたいと思っているが、具体的に何をすればいいのかわからない。地震発生からすでに1年を過ぎ、被災地支援はすでに生活物資や食料援助の段階ではなくなっていた。

そんな時、「みやぎジョネット」のブログに具体的な支援方法が挙げられているのを見つけた。その一つが、「みやぎジョネット」が運営する被災地女性の茶話会や



サロンで供されるお菓子を寄贈するという取り組みである。ブログの支援ページには次のようにある。

「皆様の地域の、おいしい自慢のお菓子を送って下さい。一週間程度日持ちするお菓子歓迎。簡単に御当地のPR紹介も添えて下さい。」

このブログを授業で紹介し、全国の郷土銘菓の提供を学生に呼びかけたところ、みな目を輝かせた。ちょうどゴールデン・ウィーク前で、学生たちは帰省を控えていたのだ。女子学生たちはお菓子を選ぶのが好きである。ちょっとしたお菓子を人にプレゼントするのも大好きである。それに可愛いメッセージをつけるのも大の得意である。郷土色豊かなお菓子、一目見てどこの名産かがすぐわかるような包装のお菓子の持ち寄り、本学のように学生の出身地が全国にまたがっている所では、

取り組みやすい支援である。お小遣い程度で買える範囲でというのも学生の関心を引きつけた。

こうして集まったのが、写真のお菓子の山である。学生が帰省先から持ち寄ったお菓子には、それぞれ思いのこもったメモがつけられている。これを事務的に宅急便で送るわけにはいかない。蕭教授と二人で直接被災地に運ぶことにした。

■ 仙台駅

宮 城は奈良から遠い。9時に京都を出発、新幹線が仙台駅に着いたのは3時前だった。「みやぎジョネット」の代表草野祐子さんが仙台駅に迎えにきてくださった。初対面なのだが、それまでに何度も心のこもったメールをいただいていたので、旧知の方のような気がするから不思議だ。

「みやぎジョネット」の事務局は仙台市内青葉区にあるのだが、今回、そこを訪問する時間はない。直接「みやぎジョネット」の活動拠点の一つ、南三陸に向かうべく、高速バスのバス停に並んだ。



奈良女大生からのメッセージつきお菓子の山

■ 南三陸の袖浜に立つ

バ スで一時間半ほど走って、柳津三丁目で降りると、そこに渡辺直子さんが車で迎えにきてくれた。被災者であり、「みやぎジョネット」の会員でもある女性である。今晚の宿をお借りする予定である。

柳津は海から距離があるので津波の影響はないが、45号線を海岸部に向かって東に進むと、途中から両側の山に立ち枯れた木々が目立つようになる。まるで一筋の線を引いたように山の下半分が赤茶けているのだ。渡辺さんから、あそこまで津波が来た証拠だと教えられた。海水を被った木は塩害で枯れてしまうのだ。

浜が近づくとつれ、流されたままのコンクリート片や丸太がそこかしこに目につくようになる。

岬を回り、袖浜地区に入ると、建物という建物は土台を残してすべて消え失せていた。志津川病院は屋上のがれきを載せたままコンクリートの廃墟と化し、南三陸町防災対策庁舎は赤い鉄骨だけを留めていた。ここは町の職員が最後まで防災無線で避難を呼びかけ、市

民もろとも津波にのみこまれた建物として知られている。

「みやぎジョネット」の活動拠点、ジョネットハウスは南三陸の悲劇を象徴するようなこの庁舎跡のすぐそばにある。つまり、ジョネットハウスは、トレーラーハウスなのである。中はキッチンつきダイニングになっており、ここで、ささやかな奈良女生のカンパによるお菓子の贈答式を行った。



ジョネットハウス（トレーラーハウス）、
後ろは南三陸町防災対策庁舎跡



良女大生の思いを込めたお菓子をプレゼント
(左から渡辺直子さん、筆者、蕭媽媽教授)

「みやぎジョネット」はここを拠点に、被災女性を対象としたプログラムを計画運営しており、渡辺さんはこの地区のリーダー的存在である。震災当初は全国に支援物資の提供を呼びかけ、提供された物資を仕分けしたり配布したりする作業が中心であったが、すでに1年を経過した今、「みやぎジョネット」がとりくんでいるのは精神的支援である。女性やお年寄りの声を聴く傾聴、ハンドマッサージや手工芸の講習会などの癒しの場の提供、そしてパソコン講習会や訪問介護員2級課程養成講座など女性の自立に関する事業にも力を入れている。

■ 渡辺直子さんの家に泊まる

そ の晩は渡辺直子さんのご自宅にご厄介になった。渡辺さんは震災前、夫とともに船に乗っていた。津波で漁船が流され、残ったのは高台にあった自宅のみ。震災直後は自宅を失った人々のために自宅を開放し、支援が来るまでの日々を励ましあって乗り切ったという。息子さんは震災後に仙台で就職したので、現在は夫

との二人暮らしである。

夕食はご主人手作りの漁師飯。刺身や魚の煮付け、ワカメの酢の物など、新鮮な海の幸が並んだ。いち早く漁を再開した知り合いが分けてくれたのだそうである。港の復旧が進まず、船を購入する見込みが立たない現在、袖浜の多くの漁師たちは養殖復興プロジェクトの一環であるワカメ養殖業協業化事業に参加することで、現金収入を得ている。これは漁業協同組合がワカメの養殖から出荷までを共同で行うものである。

■ 地元女性の声を聴く

夕 食後、地元の女性を交えて避難所や仮設住宅での生活についてお話をうかがった。

そこで漁師町特有の事情があることを知った。漁師町の漁業組合には農村には必ずある農協婦人部のような組織が存在せず、女どうしが家の枠を超えて交流するしくみがないこと。そのため、女性の声を集約し、復興計画に反映させるルートを作りにくいこと。震災後、夫がいらだちを妻にぶつけるDVも増えているそうである。ただし、最近では漁師の妻たちの意識にも変化がみられるという。漁師の家では妻も働くが、船や自宅はすべて夫の名義。水揚げがどれだけあろうとそれはすべて世帯のお金だった。ところが、復興予算で雇用された瓦礫や木材撤去の仕事は男女同一賃金で、個人の口座に振り込まれ、土日の休みもある。この仕事で生まれて初めて自分名義の貯金通帳を持ったという女性もいるとのこと。これを女性の権利や自立を考えるきっかけにしたいと草野さんや渡辺さんは語ってくれた。

自分名義の通帳を持ったことがない女性が居ることなど、思ってもみなかった私は、これまで自分がわかったような顔をして女子大生相手にジェンダー論を説いていたことが恥ずかしく感じられた。そして、この地で女どうしのコミュニティーを創出する手助けをしようとしている「みやぎジョネット」のとりくみの意義とその困難さが始めて実感できたのである。

■ 千葉公子さんの話をうかがう

漁 師さんの朝は早い。翌朝起きると、渡辺さんの夫はワカメの仕事に出かけた後だった。ワカメは早朝に収穫し、釜で茹で、塩蔵機で塩を絡ませ、圧縮機で水分を切る。私たちが作業場に行った10時前には最後の圧縮機の工程で、作業はあらかた終わっていた。

昼にジョネットハウスで千葉のり店の千葉公子さんと会った。千葉のり店は創業90年の海苔問屋である。お父さんが亡くなった後、お姉さんとともに事業を引き継いでいたが、津波で店も工場も失った。千葉さんは避難所生活一週間で、絶対に店を再興しようと心に誓った。震災を理由に自己破産する道もあったが、みなに迷惑がかかる。それだけは絶対にしたくなかったという。これまでも女の経営者ということで男同士の取引の



袖浜漁港（後ろはがれきの山）

場からはじかれ、経営に行き詰まることはあった。あんな苦勞に耐えられたのだから、こんな震災ぐらい乗り越えてみせると自分に言い聞かせてきたそうだ。

千葉さんのお話には周りの女性をエンパワーメントする強さがある。千葉のり店は、現在仮設の「南三陸町さんさん商店街」に店をオープンさせている。ここで購入した老舗秘伝の味海苔は最高だった。

■ 気仙沼

夕 刻、渡辺さんの車で気仙沼を経て新幹線一ノ関駅に向かった。途中、渡辺さんのご実家があった場所に立ち寄った。ご家族は無事だったものの、家はすべて流されていた。近くを通る南三陸鉄道のレールはすべてひん曲がり、まるで枯れ木のようにニョキニョキと石砂利から突き出ている。

途中、山あいにある小規模の酪農家を訪ね、女性に話をうかがった。ここでは津波で自宅を失った後、牛小屋を改造して避難小屋にしていた。自宅避難には避難所のように支援物資の配給がなく、食に事欠いたとのこと。また避難所によっては配給された食糧を不足のところに回さず、囲い込んでしまう例もあったという。牛をどうするかも深刻だ。牧草の汚染が指摘されて以降、地元の牧草を与えることはできず、かといって手塩にかけた牛たちを処分するには忍びなく、仕方なく高い外国産の飼料を与えつづけているのだとか。

復興がなかなか進まず、将来が見えぬことで自暴自棄になる男性も多い中、女性は不思議と落ち着き、力を発揮していったという。女は遠い将来よりも今日の家族の食事、明日の生活を考える。だから現実を見据え、状況に対応する環境適応力に優れているというのが、被災地の女性たちの自己分析である。

避難小屋の前に自家菜園があり、えんどう豆の株の横で赤と黄色のチューリップが風に揺れていた。それは生きるための闘いに挑む女たちの象徴であり、私には希望のように思えた。

貴重なことを学ばせてくださった「みやぎジョネット」の代表草野祐子さんと渡辺直子さん、貴重な話を聴かせてくださった千葉公子さんほかみなさんに感謝したい。

共催シンポジウム

わたしがた

「私語りとジェンダー」



シンポジウムチラシ

アジア・ジェンダー文化研究センターが、文学部ジェンダー言語文化プロジェクトとの共催でシンポジウムを行うようになってから、今年で4回目になる。今年度はテーマを「私語りとジェンダー」とし、主に日本近代文学における「私小説」とジェンダーとの関係について、講演会とディスカッションを行った。

講演者には、神戸女学院大学文学部の飯田祐子氏を招き、「女はどのようにして自己を語ろうとしたのか？語れなかったのか？」という問題提起のもと、明治・大正期の女性作家たちに共通の現象と、個々の作家に特徴的な問題について、ご講演をいただいた。

その後、パネリストとして吉川仁子氏と鈴木広光氏が加わり、司会の中川千帆氏(ともに本学研究院人文学系)の進行のもと、ディスカッションを行った。

12月18日、文学部ジェンダー言語文化プロジェクトとの共催で、シンポジウム「私語りとジェンダー」を開催した。



会場風景

わたしがた

「私語りとジェンダー」

- 飯田祐子氏 (神戸女学院大学・文学部 教授)



飯田氏の問題提起は明確である。明治末期の日本に生まれた「私小説」と呼ばれる小説群において、ジェンダー差はどのような形で現れたのか。「私」を語ろうとする男性にはできて、女性にはできなかったこと、ある

いは、女性であるからこそできたことはあるのだろうか、という問いかけである。

この問いに答えるためには、まず、日本文学における「私小説」の特徴を明確にすると同時に、文学における「自己表象」のあり方と変遷の過程を見極める必要があるだろう。飯田氏は、「私小説」という言葉が最初に使われた宇野浩二の評論をはじめ、文学における「私」に関する先行研究を引きながら、この小説群が、自分を登場人物とする一人称体の語りを持ち、さらにその一人称の「私」が小説家と同化していく過程を明らかにした。

ただ、ここで言う「小説家」とは、まずは男性作家のことであった。明治40年に発表された田山花袋の『蒲団』は「私小説」の実践として名高いが、作家は自己と重なる主人公の「私」を観察・描写する際、イプセン、ツルゲーネフ、モーパッサンといったヨーロッパの作家とその作品を参照する。また、志賀直哉の『和解』には、「書けない作家」としての「自分」が登場し、「書くこと」が自己表出にとって重要な行為であることを示している。その際、書くに値することはあくまでも自己の内部に生じる事柄、いわば無意識の言語化にあり、外部からの評価や反省が見られないという特徴がある。

では、女性作家の場合どうか。飯田氏はまず、『蒲団』と同じ明治40年頃に、自然主義的な筆致を用い、「自己」を素材にした作品が登場するとはいえ、視点人物としての「私」が前景化しにくかった点を指摘する。三人称の語りの中に、わずかに自己の内声がにじみ出るとしても、語り手(作家)と語られる自己(主人公)の間には“ずれ”がある。また、「書くこと」より「読むこと」に主眼があり、書き手ではなく、読んだ対象に自分を重ねる傾向が強いことが、森しげ女や岡田八千代らの作品を通じて示された。

「書く女」が登場した初期の作品としては、水野仙子の『四十余日』や岡田美知代『ある女の手紙』などが紹介された。この中で女性作家たちは、小説を書くことが許されていないこと、書いて良いのはせいぜい手紙に止まるというような、「書くこと」について女性に課せられた縛りがあることをにじませる。また、男性作家が自己の現実と作品内の作家を重ね合わせ、「書くこと」の特権化の裏返しとしての「書けない自分」を美化するのに対し、女性作家にとって「書くこと」は、自己表出というよりは生活費を得るための手段として語られることが多く、それゆえ「書けない」こととは、物理的な邪魔が入って筆が進まないことに過ぎない。

このような縛りから抜け出すために、従来の「私小説」とは異なる枠組みを作り、疑似的な一人称小説を書く女性作家も登場する。たとえば、岡田八千代は架空の人物「伊達虫子」を身代わりとして設定し、彼女の口を通

して言いにくいことを語る、という手法を編み出す。

また、「自己生成小説」の書き手として、田村俊子が紹介された。『遊女』は「女作者」を主語とする三人称体で書かれてはいるが、そこには「書けない」ことの苦悩や、書くためには素顔を隠し、「白粉」を付けねばならない女性作家のあり方が表現されている。『木之伊(ミイラ)』の口紅もまた主人公「みのる」の三人称の物語であるが、「書く女」が誕生するまでの「自己生成小説」となっている。

最後に、女性作家の自己表象に関する問題点が整理された。男性作家が「書いている自己」をそのまま描出することに高い価値を見出したのとは逆に、女性作家は女の日常を対象化し、自己との距離を持たせて描写することが多い。書く「私」や「書くこと」についての束縛がありながら、「書くこと」によって生きた女性たちの「自己」の表現方法が具体例をまじえて示された。



司会 中川千帆氏



ディスカッション風景 吉川仁子氏(中央)と鈴木広光氏(右)

飯田氏の講演の後、パネラーの吉川仁子氏と鈴木広光氏が加わり中川千帆氏の司会で、ディスカッションを行った。フロアからは、文学ジャンルによる自己表象の違いについてや、西洋文学からの影響についてなど、さまざまな質問が寄せられた。

中でも、戦前の女性作家は個人としてではなく、女性の立場(少女・母・寡婦、など)の代表者というカテゴリ付けなしには書くことができなかった、という議論や、男性が自己愛を満開にして個人を語るということが認められた反面、個人生活の切り売りともいえる「私小説」は、女性に期待される「女らしさ」から逸脱するために許容され難かったという議論は「書く女」の社会的意味を考えるうえで貴重な問題提起であったと思われる。

(記録: 高岡尚子)



奈良女子大学

女性教員数

安田恵子

2013

文部科学省による2011年度学校基本調査によると、全国における大学の本務教員数は176,684人、そのうち女性教員は36,424人20.6%であった。年々緩やかな上昇を続け、過去最高値を更新している。女性教員数の増加に向けてさまざまなポジティブアクションが導入され、その成果が現れてきたと考えられる。奈良女子大学でも「女性研究者支援モデル育成」や「女性研究者養成システム加速」等を通じて、努力が重ねられており、徐々に女性教員数は上昇している。アジア・ジェンダー文化学研究センターでは、1993年から本学の女性教員数の推移を調査してきた。今回は2013年1月31日現在の本学の女性教員数について報告する(図1、表1)。

2013年1月31日現在の奈良女子大学の教員数は195名、女性教員は65名33.3%、男性教員は130名66.7%であった。女性教員数および女性教員比率はゆるやかな上昇を示し、センターで調査を始めてから初めて30%を突破した。学部別に見ると、文学部では1993年には15.8%と3学部のうちで一番低い女性教員比率で

あったが、その後上昇し、2013年には34.3%に達した。理学部では1993年には23.2%あった女性教員比率は減少を続け、2010年度には15.4%まで低下したが、その後上昇し2011年20%、2013年には21.5%となった。生活環境学部の女性教員数は一貫して50%近くの高い値を維持して来たが、それでも1993年49.9%あった女性教員比率は2003年には一旦41.5%まで減少した。その後上昇に転じ、2007年以降ほぼ45%を維持し、2013年には48.9%と1993年時点の比率まで回復している。図や表には挙げていないが、各職階に占める女性教員数・比率を見ると、全学では女性教員の教授20名(22.2%)、准教授19名(25.3%)、講師4名(88.0%)、助教22名(88.0%)であり、上の職階に占める数値がやや上昇したものの、いまだ職階が下がるにつれて比率が上昇する傾向は改善されていない。

さまざまな大学で女性教員を増加させるための試みが展開されているが、大きな成果はあがっていない。もともと、日本における女性研究者数は少なく、短期間のうちに女性教員数を増加させるには無理がある。女性研究者を目指す女子学生数を増加させる、女性研究者登用への門戸を開く、若手研究者を育成することなども重要な課題である。また、出産、育児、介護などを抱えた研究者に対するサポート体制の充実など環境面での支援も必要であろう。女性教員数を増加させることは、性によらない雇用の平等化や多様な人材を登用するという目的以外に、一定数の女性教員が存在することによって、研究者を目指す女子学生にロールモデルを提供できるという点でも重要である。奈良女子大学はこれまで多くの女性研究者を育成し、社会に輩出してきた。それは今後も変わらない重要な使命である。本学は本学のみ成果に満足すべきでなく、学界全体のためにも一層の努力が期待される場所である。

表1 奈良女子大学における女性教員数・男性教員数

2013.1.31現在

文学部		
学科	女性教員数	男性教員数
人文社会科学	4 (17.4%)	19 (82.6%)
言語社会科学	12 (48.0%)	13 (52.0%)
人間科学科	7 (36.8%)	12 (63.2%)
	25 (36.2%)	44 (63.8%)

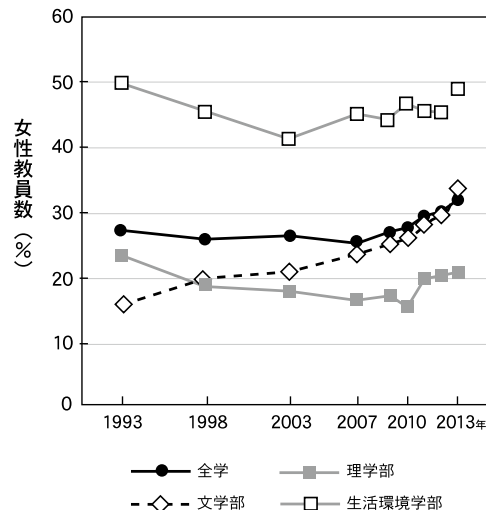
理学部		
学科	女性教員数	男性教員数
数学科	3 (25.0%)	9 (75.0%)
物理科学科	3 (16.7%)	15 (83.3%)
化学科	3 (16.7%)	15 (83.3%)
生物科学科	4 (23.5%)	13 (76.5%)
情報科学科	4 (28.6%)	10 (71.4%)
	17 (21.5%)	62 (78.5%)

生活環境学部		
学科	女性教員数	男性教員数
食物栄養学科	7 (53.8%)	6 (46.2%)
生活健康・環境学科	6 (42.9%)	8 (57.1%)
住環境学科	4 (44.4%)	5 (55.6%)
生活文化学科	6 (54.5%)	5 (45.5%)
	23 (48.9%)	24 (51.1%)

全学教員数	195
女性教員数	65 (33.3%)
男性教員数	130 (66.7%)

※教員は学部所属する教授、准教授、講師、助教とした。

図1 奈良女子大学における女性教員比率の推移



新メンバー 研究紹介

三成美保

(生活環境科学系教授)

ジェンダー視点は、さまざまな差異をもつわたしたちが共生するために不可欠の視点である。ジェンダー視点にたつ諸学は、「市民として必須の教養(市民教養)」と言えよう。大学カリキュラムのなかにも、ジェンダー諸学は積極的に位置づけられねばならない。そうしたジェンダー諸学のなかで、筆者の研究領域は、①ジェンダー法史学、②ジェンダー法学、③ジェンダー史の3つにまたがる。最近は、④ジェンダー教育(法学・歴史学)に対する関心も強めている。

①筆者がジェンダー研究を本格化させたのは、1990年代半ばである。法制史学会で「ジェンダー法史学」を提唱し(1999年)、シンポジウム「ジェンダーの法史学—近代法の再定位・再考」を企画・主宰した(2003年)。その成果が、『ジェンダーの比較法史学—近代的法秩序の再検討』(2006年)である。主著『ジェンダーの法史学—近代ドイツの家族とセクシュアリティ』(2005年)は、3部構成(全10章)をとる。第1部『「ジェンダー秩序」と法秩序』(理論・学説)、第2部「近代的ジェンダー・バイアスの生成」(西洋近代の公私二元構成、近世ドイツの姦淫罪、嬰兒殺論、公共圏)、第3部「法秩序のなかの家族と生殖」(近代家族論、未婚の母、婚外子法改革、ナチス優生政策)。同書は、第17回尾中郁夫・家族法学会奨励賞を受賞した(2006年)。

②2003年、ジェンダー法学会が発足した。筆者は理事(現・副理事長)として学会運営・シンポジウム企画にたずさわっている。2012年、学会創設10周年記念として『講座ジェンダーと法』全4巻が刊行され、第1巻「ジェンダー法学のインパクト」の編者をつと

めた。また、学生・一般向けの教科書として、『ジェンダー法学入門』(2011年)を出版した。

③ジェンダー史学会を中心に、『ジェンダー史叢書』全8巻が刊行された(2009~2011年)。筆者が担当したのは、第1巻『権力と身体』である。近年、男性性やセクシュアリティの研究にも取り組んでいる(科研費基盤研究(B)2009~2011年「マスキュリティの比較文化史」)。2013年6月には、ジェンダー史学会シンポジウム「歴史のなかのセクシュアリティ—同性愛/性的指向の比較文化史」が本学にて開催される(本センター共催)。

④ジェンダー教育については、科研費基盤研究(B)「歴史教育におけるジェンダー視点の導入に関する比較研究と教材の収集及び体系化」(2012~2014年)を研究代表者として進めている。成果の一端は、『歴史を読み替える』全2巻として出版予定である(2013年)。日本学術会議には複数のジェンダー関連分科会が存在し、きわめて活発に活動しているが、そこでもジェンダー教育は非常に重要なテーマとされている。筆者もまた日本学術会議連携会員として、シンポジウム「教養は何の役にたつのか—ジェンダー視点からの問いかけ」を開催予定である(2013年6月)。



帰国留学生のキャリア形成と ライフコースに関する調査 IV

報告

「帰国留学生のキャリア形成とライフコースに関する調査、」は、平成21年度から5ヵ年計画でスタートした本センターの重点プロジェクトであり、女性のキャリア形成の視点から、本学に留学した学生たちが帰国後にどのような職につき、どのようにキャリアを形成し、どのような人生を歩んだのかについての調査を行うものである。

本学には戦前の奈良女子高等師範学校(以下、「奈良女高師」)時代から留学生教育に携わってきた歴史がある。そのためこのプロジェクト調査も奈良女高師の留学生に重点を置いている。本研究は、「校史史料(留学生関連資料)調査」、「帰国留学生へのヒヤリング調査」、およびセンター員の研修と調査報告を兼ねた「公開研究会」の3部門から構成される。また平成23年度からは校史史料の保全のため「校史史料(留学生関連資料)デジタル化作業」も行っている。

これらの成果は今年度の特別展示で公開しており、これについては今号2~4頁の報告を参照されたい。今年度の調査としては「校史史料調査」、「校史史料デジタル化作業」を重点的に行ったので、これを以下に紹介する。

校史史料調査

| プ | ロ | ジ | ェ | ク | ト | 研 | 究 |

当センターでは昨年度より奈良女子大学所蔵の女高師時代の校史史料について調査を行い、留学生についての資料を蒐集・整理している。調査にあたったのは、杉本史子(立命館大学非常勤講師)・羽田朝子(センター助教)の2名である。本号では24年度の成果を二つのテーマに分けて報告する。

1

中国人留学生と恋愛問題

奈良女高師で毎月一回開かれていた評議会や教官会議の記録からは、留学生たちの学内外における動向や、学校側から見た教学上の問題が窺える。今回は中国人留学生と恋愛問題に焦点を当てて紹介する。

奈良女高師では在学中の恋愛はご法度とされ、さまざまな厳しい規則があった。これは当然のことながら、留学生にも適用された。中国では長らく儒教規範に基づく厳格な男女の別が存在していたことから、留学生たちは恋愛とはあまり縁がないと思われがちである。だが当時の史料からうかがえる姿は、必ずしも禁欲的な一面だけではない。その原因の一つに、1910年代後半から始まった五四新文化運動の影響が挙げられる。新文化運動では、封建的儒教道徳が批判の対象となり、女性解放や性道徳の革新への要求が高まった。知識人

青年たちは、従来の偏った貞操観念や一夫一妻多妾制に疑問を抱き、西洋からもたらされた「自由恋愛」による結婚という考え方を熱狂的に受け入れた。その結果、都市の青年の間では、「自由恋愛」がもてはやされ、恋愛をすることが知識人の証しであるかのような風潮すら現れた。もちろんこのような現象は、都市のごく一部に過ぎず、農村では依然として幼少時に婚約者を決める風習が根強く残っていた。つまり留学生に恋人または親の決めた許嫁がいるというケースは当時決して珍しいことではなかったのである。奈良女高師に来た中国人留学生の中にも、恋人や婚約者、さらには配偶者がいた者さえいた。

評議会や教官会議の記録からも、その片鱗をうかがうことができる。1925年には、特設予科の留学生が日本で同国人男性と婚約をしたが、それに嫉妬した別の男子留学生が、彼女の素行を書き連ねて学校に送り付けてくるという騒ぎがあった。1929年には理科の留学生が、神経衰弱にかかっていた広島高等師範学校の留



男子学生と、京都の吉田山にて。

学生を「呼び寄せて同宿にて静養せしめ」た。この相手は中国で教鞭を執っていた時に知り合った男性だという。結局、学校側は「此度ハ不問ニ付スルコトニ」したようだ。1930年には、同じく日本留学生であった兄の友人と由良の海水浴に出かけた学生がいたが、「決シテ不品行ナコトハシナイト同人ガ辯疏」したため、やはり処分保留となった。

このように彼女たちの恋愛相手は、日本に留学している同国人男性が多かった。日本で知り合うケースもあったが、中には恋人を追いかけて日本に留学にやってきた女性もいた。通常、親族であれば通信や面会を許されたため、留学生たちの多くは、恋人を「従兄」と申し出て連絡を取り合っていた。在校中「従兄」に会うと言って外出許可を取り、男子留学生と京都に遊びに行った、とヒアリング調査で語った元留学生もいる。

また恋愛に限らず、性別の枠を越えた留学生同士のネットワークも存在していた。中国人留学生の乗った船が港に到着した場合には、男女に関わらず阪神在留の中国人学生が出迎えて公園を案内したり、一緒に食事をしたりする習慣があった。学校側はこうした留学生の動きに神経を尖らせ、「大層迷惑デアル」と記しているが、政治的な動きに発展することがない限り、直接介入することはなかったようだ。学校側はまた、「従兄」が実の親族ではなく、恋人や留学生仲間であることも、うすうすは把握していたらしい。教官会議の議事録には「入學式ノ日來リシ京都大學在學ノ彼レノ従兄ト称スル者トノ關係ハ大イニ注意ヲ要ス」といった記述や、「従兄ナルモノ多シ脱線セヌヤウ注意ヲ要ス」といった記録も残されている。しかし、大方は社会規範が異なるので仕方がないという見解から、大目に見ていたようだ。中には「Lニハ婚約者アル様子ニテ特別予科入學規則ニ適合セザル様子ナルモ中華民國ノ習慣トシテ止ムヲ得ザルモノト認ム」といったケースもあった。L女史の場合は半ば公認されていたようで、「Lノ婚約者ガLニ

面会ニ來タ」ことも記録されている。ただやはりこれは稀なケースであり、外部からの指摘で男女交際が明るみになった場合は、「家庭ノ事情」あるいは「本校教育ノ趣旨ニ適セズ」という理由で退学という結果になった。

厳格な校風で知られる奈良女高師だったが、留学生たちはその規則を上手にすり抜けながら、意外に大胆な行動を取っていたようだ。異性の同胞とつながることによって、彼女たちは苦難の多い留学生活を乗り切ろうとしていたのかも知れない。（杉本史子）

2 中国人留学生の日本見学旅行

奈良女高師では、留学生を対象とする修学旅行が度々行われており、校史関係史料には特設予科や本科で実施された様々な旅行の史料が残されている。今回は本科の卒業年次にある留学生を対象に行われた日本見学旅行について紹介する。

戦前、外務省の文化事業部は義和団事件の賠償金を運用資金として1923年から中国関連の教育文化事業を展開した。これは日中間の相互理解や親善、それによる共存共栄を目的として掲げながらも、当時高まりつつあった留学生の反日感情を緩和するという政治的意図が込められていた。この事業の一つとして、文化事業部は1926年から41年にかけて卒業をひかえた中国人留学生に対し日本見学旅行の補助を行っており、この関係史料が外務省の外交文書に収められている。1942年以降は対満事務局がこの日本見学旅行を引き継ぎ、満洲国留学生に対してのみ旅費を支出したことが『満洲国留日学生会会報』といった資料から分っている。しかし対満事務局の後援による旅行については政府側の史料が残されていないため、その詳細はこれ



修学旅行の様子

まで不明であった。

この政府後援の日本見学旅行は奈良女高師でも行われており、奈良女子大学の校史関係史料には当時の外務省や対満事務局へ提出した「旅行案／報告」の控えが残されている。ここには1934年、36年、40年、42年、43年に実施された5回分の旅行のルートや参観場所のほか、見学目的や引率教官の所感が詳細に記されており、さらには留学生の旅行記も含まれている。特に42年、43年の旅行は対満事務局の後援によるもので、この史料は他に例をみない非常に貴重なものである。

この日本見学旅行で支給された旅費は、学生1人あたり70円であり、その支給には次のような条件があった。対象は卒業年次にある中国人留学生であること。引率教官の下に5名以上の団体を組織すること。日程が10日間以上であること、である。奈良女高師もこの条件を満たす内容で申請し旅行を実施している。

当時、日本では高まるナショナリズムを背景に、「日本民族と日本文化の発祥の地」である関西や九州への旅行が一大ブームとなっていた。そのため、奈良女高師で行われた旅行も旅行先はいずれも九州で、7～11日間にわたって彼の地の名所旧跡を見学している。ただし1934年、36年、40年には帰途に広島や岡山にも立ち寄っている。また観光地だけでなく九州帝国大学(全年)や広島文理科大学(1934年)も訪れており、特に1934年、36年には当地の女子師範学校や高等女学校を訪問し、その校舎や設備、授業を見学している。

留学生の旅行記を見ると、彼女たちはこの見学旅行を心待ちにしており、九州の名所旧跡に興味をもって訪れ、その歴史を偲び、日本文化を理解しようと意欲的に取り組んだことが分かる。毎回、当地の奈良女高師の卒業生(佐保会員)が駆けつけて案内したり、歓迎会や食事会を開くなどしており、これに対し留学生は厚く感謝の辞を述べている。また旅行中に大学を訪問したことは留学生の向学心をかき立てたようで、例えば広島文理科大学を訪れた時の記述には、「その設備の完

全と蔵書の豊富とで一層私の知識欲を促進させました。大学に入ればどんなに勉強出来るのであらうと想像しました」とある。

そして旅行中、当地の女子師範学校や高等女学校を訪れたことは、祖国の教育界で貢献しようという留学生たちにとって大きな刺激となったようだ。例えば次のように述べている。「私は今回各地の師範学校や高等女学校等を参観し…(中略)…将来国に帰りまして女子中等教育上参考模範とする点が実に多かったと思ひました。これは今度の旅行の大なる意義でありました」と。そのほか、参観先の学校が開いた歓迎会では、生徒たちの歌や舞踊、手製の料理によってもてなされたことが記されている。また1936年に福岡女子専門学校を訪問した時は、その学校の教員や研究生達との茶話会で女性問題を討論したという。

1943年の旅行記には、戦争の影が色濃く反映されている。例えば食料不足が深刻となっていた当時であって、旅館の食事に卵焼きやハム、白米の御飯が出たことに大喜びする様子が記されている。また観光先で店先に野菜が山のように積まれているのを見て喜んで買い求め、奈良へと郵送している。そして旅先の駅で学校生徒の団が出征兵士を「海ゆかば」を歌って送り出すのを目撃したことが記されている。

総じて留学生たちは学校生活の最後に大きな思い出ができたことに満足し、例えば次のように言っている。「私達はこの旅を肺腑に銘じて一生にも忘れられない。尚それと同時に常に私達の使命を忘れずに私達の目的に向って奮励努力して邁進することを心から誓ふものでございます」と。

ただしこの日本見学旅行は悪化する日中関係のなか外交政策の1つとして行われたものである。留学生たちの知的好奇心や旅の楽しみを利用して、反日感情の緩和を目論んだものであったことを忘れてはならないだろう。

(羽田朝子)

校史史料デジタル化作業

|プロジェクト|研究|

当センターでは、「校史史料調査」の過程で校史史料が劣化状態にあることを発見し、より円滑な調査の進行や貴重な資料の保全のためにデジタル画像化が必要であるという結論に至った。そのため、平成23年度から留学生関係史料のデジタル画像作成に着手している。その具体的な作業には、資料の保全と活用について専門的な知識や経験を持つ島津良子氏、小泉美郷氏に指導を仰いでいる。

両氏はともに本学で歴史学を修めた卒業生である。島津氏は現在専門分野として歴史学のほかアーカイブ学を研究しておられ、複数の自治体で地域史料の調査指導を行っている。また小泉氏も国際日本文化研究センターで民事判決原本のデータベース化事業に従事した経験を持つ専門家である。



デジタル化作業について

校史史料(奈良女子大学図書館所蔵『校史関係史料』)とは、奈良女高師時代に蓄積された公文書で、簿冊数1500冊以上にもなる膨大な史料です。これらは戦中・戦後の粗末な酸性紙の書類が多く、劣化の激しい原本は保存してデジタル画像を閲覧に供する必要があります。センターのプロジェクトでは、留学生に関する史料38簿冊のデジタル化を目指して、作業に取り組んでいます。

まずは作業終了後に元の状態に戻して保存できるように、採寸など簿冊の現状記録をとります。次に簿冊の表紙と事務ひもを取り除き、書類を内容のまとまりごとの1件単位に分け、1件ごとの紙の一括関係、枚数などを記録していきます。さらにすべての書類からこよりや錆びたクリップ・虫ピンなどをはずして(解綴作業)、一枚ずつの紙の状態に戻った史料をスキャニング(デジタル画像の作成)します。最後にこよりなどで1件ごとの一括を復元して元の簿冊の状態に戻します。あとは内容検索が可能になるように、1件ごとの件名目録を作成すれば完了です。

このデジタル化作業が完了すれば、利用者は簿冊目録と件名目録を見て、閲覧したい史料を見つけ、その史料のデジタル画像にアクセスすることができるようになります。校史史料は戦前の女子高等教育の歴史を跡付ける貴重な資料であり、史料のより一層の活用のためにはデジタル画像化が不可欠だと考えています。

(島津良子)



採寸作業



スキャニング作業



新しいこよりによる復元作業

2012年度のセンターの活動

■センター主催のシンポジウム・講演会・研究会

- 公開研究会「災害とジェンダー-台湾と韓国の事例から」
日 時:2012年4月25日(水)14:40~16:10
会 場:奈良女子大学S230
報 告 1:蕭媽媽(台湾国立清華大学副教授、ジェンダーと社会研究室主任)
「台湾の災害と女性」
報 告 2:松岡悦子(奈良女子大学教授)
「韓国の災害とジェンダー」

● 女性映画監督が語る「映画制作とジェンダー」

日 時:2012年6月29日(金)16:20~17:50
会 場:奈良女子大学G101
講 師:浜野佐知(女性映画監督)



● 『百合子・ダスヴィダーニヤ』上映会、講演

日 時:2012年6月30日(土)13:00~16:30
会 場:奈良女子大学講堂
講 師:浜野佐知(女性映画監督) & 山崎邦紀(脚本家)

● 特別展示

「奈良女子高等師範学校とアジアの留学生」
期 間:2012年10月28日(日)~11月8日(木)9:00~16:30
会 場:奈良女子大学記念館
講演解説:杉本史子(立命館大学非常勤)・羽田朝子(センター助教)
後 援:一般社団法人佐保会・教育システム研究開発センター



■センター共催のシンポジウム・講演会

● 文学部言語文化学科ジェンダー言語文化プロジェクト 第6回シンポジウム「私語りとジェンダー」

日 時:2012年12月18日(火)14:40~16:30
場 所:奈良女子大学S228

講 師:飯田祐子(神戸学院大学文学部教授)

「私語りとジェンダー」

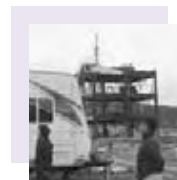
ディスカッション:飯田祐子、吉川仁子(奈良女子大学講師)
鈴木広光(奈良女子大学教授)

司会:中川千帆(奈良女子大学准教授)

共 催:ジェンダー言語文化プロジェクト

■調査

- プロジェクト研究
「帰国留学生のキャリア形成と
ライフコースに関する調査Ⅳ」
- 大学の女性教員数の変動
- 宮城ジョネット訪問



組織

● センター長

野村鮎子(研究院・人文科学系)

● 運営委員

高岡尚子(研究院・人文科学系)
松岡悦子(研究院・生活環境科学系)
安田恵子(研究院・自然科学系)

● メンバー

内田忠賢(大学院人間文化研究科)
大平幸代(研究院・人文科学系)
鈴木則子(研究院・生活環境科学系)
中川千帆(大学院人間文化研究科)
松岡由貴(研究院・自然科学系)
三成美保(研究院・生活環境科学系)
山崎明子(研究院・生活環境科学系)
吉田容子(研究院・人文科学系)

● 特任教員

羽田朝子

● 協力研究員

周一川(日本大学)
ライラ・ママティ(新疆大学)
竹田治美(奈良産業大学)

● 事務担当

研究協力課

● 連絡先

奈良女子大学アジア・ジェンダー文化学研究センター Tel:0742-20-3611 Fax:0742-20-3612
〒630-8506 奈良市北魚屋東町 奈良女子大学研究協力課内 E-mail:a-gender.c@cc.nara-wu.ac.jp

編集 後記

今年度は、2009年から継続してきた「帰国留学生のキャリア形成とライフコースに関する調査」の成果として、特別展示「奈良女子高等師範学校とアジアの留学生」を開催しました。また初の試みとして女性映画監督をお招きし、講演会および映画の上映会を開きました。毎年恒例の文学部言語文化学科ジェンダー言語文化プロジェクトとの共催シンポジウムでも活発な意見交換が行われました。また長期調査「奈良女子大学女子教員数の変動」(2006~)でも引き続き成果をあげています。ニュースレター第12号ではこれらの活動をお伝えします。(羽田朝子)